



第137回 父と投網のこと

子どもの頃、よく祖父と父に連れられて近くの千代川に鮎とりに出かけた。父は投網で、祖父は釣り専門だったが、子ども心に黒々と流れる川がとて怖かった。父は海も好きで、よく海水浴場の端っこの岩場に連れていかれた。海は青黒く見え、その奥に何があるのかわからない不気味さが怖かった。でも大人になってみると、あの頃の父の気持ちがよくわかる。砂浜は生き物が少なくてつまらない、岩場のほうが魚影も濃くて面白いのだ。私の子どもがまだ小さいとき、島根半島の海水浴場へ出かけ、端っこの岩場探検をしたものだ。海のなかの魚や貝などを眺めているのが楽しい。結局、私は父と同じことをしていたのだ。

▼投網をとりだして

父はとにかく投網が大好きで、川から戻ると、採れたての鮎を新聞紙の上に並べて写真を撮っていた。父の遺品を整理したとき、大切にしまひ込まれていた投網を見つけた。一緒に川に行っていた頃の記憶がよみがえり、がぜん自分で投網をやってみたくなった。投網といっても、まず投げ方がわからないし、鮎をとるには鑑札免許が必要らしい。インターネットで投網の投げ方を練習し、釣具屋で鑑札を手に入れ、ついに川デビューとなった。おそろおそろ、川べりから投網をうってみる。「よし、うまく広がった、これで鮎が入っていれば完璧」なのだが、そううまく事は運ばない。投網を打っても打っても一向に鮎がとれないと、心がくじけてくる。投網の好きな人に相談すると、網を打ってそのまま水中眼鏡で観察し、鮎を手でおさえこむのだとアドバイスされて、ようやく合点がいった。投網もなかなか奥が深いのである。それから一人で川を渡り歩いて投網を打ち、水中を覗いては鮎をおさえるようになった。川の時間になじんでくると心身が生き返り、俗世のことはすべて忘れてしまう。ああそういうことか、だから父はいつも川に通っていたんだ。

▼父と同じ年齢になって

月日は流れ、自分も60代半ばとなり、父の亡くなった年齢を超えた。東京から孫たちが里帰りするということで、久しぶりに投網をやってみる気になった。孫はまだ小学校に入ったばかりで、川は危ないので、砂浜で投網を打つ姿を見てもらうことにした。夕暮れ時に孫たちと海へ出かける。海水浴客のいない砂浜から海に向けて投網を放つ。静かな水面に投網のさざ波が広がっていく、孫たちが網を引っ張る、濃厚な潮のにおいがして、はるか遠くに大山が見える。魚は一匹もとれないけれど、深い充実感がある。上の女の子は何度投網を打っても魚が取れないので、「もういいかい、もういいかい」とせがんでやめようとしな。本当は海水浴場の砂浜で魚が採れることなど滅多にないのだけれど。魚とりには「なかなかとれないからこそ、面白い」という逆説がある。自分で苦労してやってみて、失敗したり成功したり、そういう経験があつてこそ楽しみは深くなるのだ。孫たちは二度と投網に触れることはないかもしれない。でも、あの夏の日夕暮れどきの、砂浜の風景や海風のにおい、そして投網を引く重さを、いつか思い出してほしいと願うのである。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにくち しんいち)